

「おおいた早生」の特性

1) 品種の特性

「おおいた早生」は大分県柑橘試験場（現大分県農林水産研究指導センター果樹グループ）で昭和63年に交配育成した「今田早生」の珠心胚実生であり、減酸が極めて早く、果樹グループ（国東市）において9月中旬から収穫可能な極早生温州である。

(1) 樹の特性

樹勢は極早生温州の中では強い部類に属し、普通温州に似た生育をする。樹姿は開張性である。枝の伸長は旺盛で、太さは中庸であるが節間がやや長く、密生しない。葉の大きさは「今田早生」、「宮本早生」と比べて同程度であるが、葉柄がやや短い。育成当初は枝梢にトゲが認められたが、結実部位はトゲが少なく、樹勢が安定して結実するようになると次第に消失する。また無刺系統の選抜により現在は消失している。

結実は良好で隔年結果はほとんどしないが、他の極早生温州、早生温州と比べると着花量が少ない傾向にあり、有葉花の割合が多い。開花期は「宮本早生」と同程度で、「宮川早生」より2～3日早い。着果過多になると軽度の隔年結果をすることがある。

(2) 果実の特性

果実は「宮本早生」に比べて、大きさはやや小さく、果形は果形指数135程度で扁平である。果面はやや粗く、果皮はやや厚い。着色は「宮本早生」と同程度かやや早く、育成地（国東市）で9月下旬に1～2分着色となる。

全体的な緑色の抜けは「宮本早生」よりやや遅いが、紅がさすのは早く濃い。

果皮、じょうのう膜は「宮本早生」よりやや厚く、果肉はさじょうがやや大きい。

糖度は、「宮本早生」に比べてやや高く、育成地で9月下旬に9度程度となる。クエン酸濃度は育成地で9月中旬に1%程度、9月下旬に0.8%程度となり、減酸が極めて早く、9月中の食味は良好である。10月に入り着色が進むと浮皮が発生する。



写真1 「おおいた早生」の果実

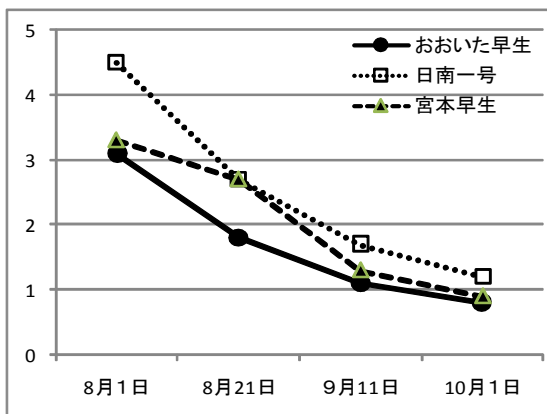


図1 極早生品種の酸の変化



写真2 「おおいた早生」の結実状況